

# 環流



第195号 令和7年12月19日

<目次>

児童の活動：潮見台小学校……………P1  
 巻頭言：赤松 慎也 校長……………P1  
 教育実践紹介：小樽市算数数学教育会…P2  
 所内検証授業1, 2……………P3  
 北海道教育研究所連盟胆振大会……………P4  
 初任者の紹介3……………P4

学習発表会5年生の  
器楽演奏



運動会での  
よさこいソーラン



## 「多様性を力に変える学校づくり」

小樽市立潮見台小学校 校長 赤松 慎也



人口減少が進み、社会の構造や価値観が大きく変化する中で、教育には「多様性を認め合い、ともに生きる力」の育成がますます求められています。AI やデジタル技術が急速に進展する社会においても、人と人とのつながりを大切にし、他者の思いや立場を理解しながら協働できる力こそが、これからの時代を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力だと感じています。

本校では、落ち着いた学習環境の中で、意欲的に学び、友と共に高めあう姿が多くみられます。一方で、発達の特性等により個別の支援を必要とする児童も増えており、通常学級にも個別の支援が必要な児童が散見され、まさに一人一人が異なる背景や個性をもって学んでいる状況です。こうした多様な子どもたちが共に学ぶ学校こそが、社会の縮図であり、教育の最前線だといえます。

そこで本校では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指し、教職員が力を合わせて授業改善を進めています。ICT を活用した学習支援ツールや一人1台端末の活用により、子ども一人一人の理解や到達度を可視化しながら、指導の個別化や学習の個性化を推進しています。同時に、グループでの話合いや相互評価を通して、自分の考えを伝え、他者の考えを受け入れる「対話的な学び」にも力を入れています。子ども同士が互いに学び合い、認め合う姿こそ、私たちが目指す「共に伸びる学び」の実現です。

また、教職員が互いに支え合う「チームとしての学校づくり」も大切にしています。特別支援教育コーディネーターや通級指導教員、学年担任が密に連携し、一人の児童を多面的に支える体制を整えています。こうした協働の姿勢が、子どもたちに安心と信頼を与え、学校全体の落ち着きや温かさにつながっています。

今後も、発達支持的生徒指導の視点を大切にしながら、多様な子どもたち一人一人の可能性を最大限に引き出す教育を推進していきます。変化の激しい時代にあっても、学校が子どもたちにとっての安心の拠り所であり、学びと成長の原点であり続けるよう、職員一同、力を合わせて取り組んでまいります。

< 調査研究活動事業 研究推進団体の実践紹介：小樽市算数数学教育会 >

## 未来社会を切り拓く力を育む算数・数学教育の探究 ～主体的・対話的で深い学びの実践を通して～

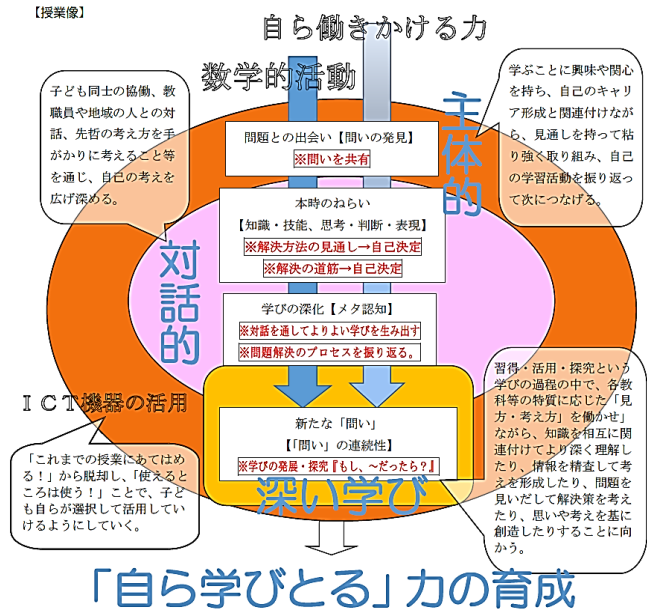
### 1 はじめに

今年度、実践の重点を『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を実現する授業づくり』とし、小学校25名、中学校5名の計30名の会員が集まり研究を推進している。本会では、「問題解決学習を通して、自ら課題を見つけ、解決し、学びを進める子どもの育成」を20年以上前から研究の柱としてきた。今求められる身につけるべき資質・能力と重なる点が多く、再度『教科の本質』と『令和の日本型学校教育』の両面を位置づけた授業研究を会員各自で実践している。

### 2 研究の推進

研究内容は、以下の【3つの工夫】を柱に進めており、それらを位置づけた授業像は右の様に示している。

研究内容1 <sup>①</sup>	研究内容2 <sup>②</sup>	研究内容3 <sup>③</sup>
【個別最適な学びの工夫】 視点1：解決方法や解決の道筋を選択するなど学び方を自己決定する場の設定 <sup>④</sup> ※指導の個別化 <sup>⑤</sup> 視点2：子ども一人一人が自らの学びを進展させたり、探究したりする学習を位置づけた単元計画の工夫 <sup>⑥</sup> ※学習の個性化 <sup>⑦</sup>	【協働的な学びの工夫】 視点1：問いを共有できる問題設定 定や問題提示の工夫 <sup>⑧</sup> 視点2：対話を通して、よりよい学びを生み出すことができる指導方法の工夫 <sup>⑨</sup>	【一体的な充実に向けた工夫】 視点1：ICT機器の効果的な活用についての工夫 <sup>⑩</sup> 視点2：単元を通して学習したことを活用する場の設定 <sup>⑪</sup> 始点3：ルーブリックを活用した授業の見取りの改善について <sup>⑫</sup>



11月14日(金)に花園小学校難波教諭による研究授業を5年2組において開催した。単元は「四角形と三角形の面積」の5/16。研究内容に係る本時の内容は以下の通りとなっている。

#### 研究内容1【個別最適な学びの工夫】

- ・三角形の面積の求め方を自分になった方法(紙ベース・デジタルベース)でアウトプットする。

#### 研究内容2【協働的な学びの工夫】

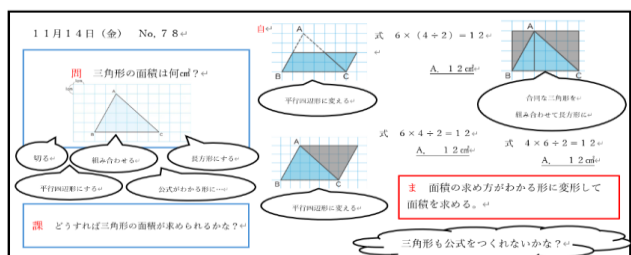
- ・他者参照する中で、共通点や相違点に目を向けることで「答えは同じでも様々な考え方があり」ことに気づく。

#### 研究内容3【一体的な充実に向けた工夫】

- ・一人一台端末を活用し、個人思考や協働思考、他者参照の際に自分で最適な方法を選択して学び続ける。

前時までの活動で、児童は「面積を求めるには習った形にすると公式で求められる」ことを既習事項で身につけている。本時も、ほぼ全員が解決の見通しを持つことができた中で、個人思考、協働思考へと展開した。端末やノートを用いて、主体的に対話的な学びをする児童も多かった。

代表児童の考えをもとに協働思考する場では、式の意味に着目させる指導者の問い返しがあった。次時へつなげる「式をよむ」見方・考え方を持たせることができた。結果、次時では児童の声で公式化することができた。



### 4 おわりに

本会では、3学期に年度のまとめとして講演会や2回目の研究授業を予定している。「算数数学が好き」と感じられる子どもたちが増えるよう、今後も授業研究・実践を積み重ね、成果を発信することで、本市の算数数学の学力向上を目指していく。

## 所内検証授業について

小樽市教育研究所では、今年度、第14次研究の1年次目の研究を進めています。研究員による所内検証授業を2回実施しましたので、概要を紹介します。

### <柴田まみ研究員（潮見台小）の検証授業>

日時 10月8日（水） 算数 6年生

単元 「角柱と円柱の体積」 2/6

（協議内容1）指導の個別化～一人一人にアプローチする指導の工夫

（1）すべての子どもが目標を達成するためのアプローチの工夫

- ・単元を通して、1時間の流れを理解させ、見通しをもって学習を進めることができていた。
- ・自力追及への見通しを持たない児童に chromebook を活用したヒントを用意し、学び方を自ら選択できるようにしたことは有効であった。

（協議内容2）学習の個性化～選択を可能にする学習

（1）子どもの自己選択や自己決定を尊重する場面の設定

- ・三角柱、四角柱、円柱のどの図形を求積するかを児童に選択させることにより、自力追及では根拠をもって解決しようとしている姿が見られた。

（2）多様な他者と協議し、異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びにつながる学習活動

- ・児童自身が目的をもって交流できるよう教師の声掛けが適切であった。

◇ICTの特性や強みを生かした授業改善

- ・振り返りには、chromebook を使用し、自らの学びの足跡を一覧で確認でき他者も参照できるようにすることで、次時につなげたり、発展させたりすることができていた。

### <八柳圭介研究員（松ヶ枝中）の検証授業>

日時 11月12日（水） 数学 1年生

単元 「比例と反比例の利用」 19/22

（協議内容1）指導の個別化～一人一人にアプローチする指導の工夫

（1）すべての子どもが目標を達成するためのアプローチの工夫

- ・TTの役割が明確で、解決できない生徒へきめ細やかに支援することにより、個人差を踏まえた指導がなされていた。
- ・ワークシートを用意することにより、何を考え、何を求めるのかがわかりやすかった。

（協議内容2）学習の個性化～選択を可能にする学習

（1）子どもの自己選択や自己決定を尊重する場面の設定

- ・難易度が違う問題が6つ提示され、生徒は興味をもって取り組むことができていた。
- ・一人でも、グループになって相談してでも解決してもよい環境づくりは、問題解決に有効であった。

（2）多様な他者と協議し、異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びにつながる学習活動

- ・他者との交流は、根拠をもって行わせることにより、さらに自分の考えを深めることができていた。
- ・小集団交流において、話し合う観点を提示することにより、話し合いが深まった。

◇ICTの特性や強みを生かした授業改善

- ・問題把握のための動画、ヒントなどが準備されており、生徒が課題を解決するために有効であった。
- ・問題を振り返ったり、既習を振り返ったりするのに chromebook を有効に活用していた。

令和7年度第80回北海道教育研究所連盟研究発表大会(胆振大会)  
兼第67回全国教育研究所連盟北海道地区研究発表大会より

令和7年8月28日、29日の2日間、だて歴史の杜カルチャーセンターで、上記の研究大会が開催されました。小樽市教育研究所からは、齋藤研究員がZ o o mで参加しました。

1 全体発表

第18次研究の概要

<主題>一人一人の子どもを主語にする学校教育の実現に向けて

- 研究内容1 全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」
  - ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現する授業の実践事例のよさを共有し、活用及び普及に向けた協議を通して、「授業のポイント」が伝わる実践事例及び普及啓発資料を作成する。
- 研究内容2 子どもの成長を支える連携・協働体制の構築
  - ・道研連に加盟している各研究所や研修センターの連携・協働の在り方を計画・実践し、実践の成果や課題を協議する。また、持続可能な連携・協働の在り方を検討する。

2 記念講演

演題 「一人一人の子どもを主語にする学校教育の実現に向けて  
～次期学習指導要領改訂の論点を踏まえて～」

講師 国立教育政策研究所初等中等教育研究部長 白水 始 氏

内容

- (1) 個別の学習活動を入れるだけだと、深まりのある学習にならない。
  - ①一人一人のわかり方を大切にする。
  - ②次期学習指導要領改訂の論点を踏まえる。
  - ③学び方の違いを活かす。
- (2) 「主体的・対話的で深い学び」のための授業研究に必要な要素について。
  - ①P～どういう対話が起きる「はず」か、創って
  - ②D～実際に授業で試してみても
  - ③C～対話とできれば一人一人の事前事後の考えの変化・深まりを追って
  - ④A～仮説を検証し、次の授業につなげていく。  
このPDCAサイクルを学校全体で回すことが大切である。
- (3) 協議から
  - ①「個別か一斉か」といった二項対立ではなく、児童生徒が自分なりに深く学べる授業づくりの視点が重要である。この考え方を研究所・センターから現場へ継続的に発信していくことが重要である。
  - ②児童生徒の実態把握や教育実践・研究の検証の質を高めるため、データの利活用に関する講座を設けることが有効である。データに基づいた教育的判断や実践の改善を支える仕組みとして、研究所・センターの役割を強化していくことが求められる

<令和7年度 初任者紹介・その3>

今回1名の紹介となります。これをもちまして今年度の初任者紹介は終了です。今年度は14名の皆さんを迎えることができました。

小樽市立幸小学校 教諭 清水 穂乃香



今年度より新規採用として小樽市立幸小学校に着任しました、清水穂乃香です。子どもたちと過ごす毎日は、刺激的で楽しく、とても充実しています。どんどん成長していく子どもたちの様子を、こんなに近くで見ることができ、支えることができるこの仕事に「やりがい」を感じています。子どもたちにも保護者にも信頼される教師になれるよう、学ぶ姿勢を忘れずに努めていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。